

始まりの風景

齊藤 晴之

富山大学 学術研究部 芸術文化学系 教授

はじめに

温かい春の日差しに輝く、高岡キャンパスの自然は印象的で、万葉の歴史から歌に詠まれる二上の自然に触れ、この地で、ものづくりを通して、研究や制作、教育に携われることをうれしく思いました。穏やかな日々の始まりです。

平成6年の4月から芸術文化学部の前身である、国立高岡短期大学での生活が始まりました。当時は専攻ごとに、複数の教員が、それぞれの大きな教室で一緒に居ました。そのことが、学生も含めて、より家族的な繋がり強い雰囲気を作っていました。当時の漆工芸専攻もそのようなところでした。

ひそかに、キャンパスの中をひと周りして散歩することが、ひと時のリフレッシュでした。今も変わらず、そのような想いになることがあります。

高岡キャンパスにはどんぐりの成る木が多く植林され、季節になると地面に落ちたどんぐりが芽を出します。その芽を掬って、苔玉を作ることを始めました。施設担当の方に許可をもらって、オムニバスの「美術の楽しみ」という授業で履修の学生たちと苔玉を作って、イラストボードにスケッチをしたり、秋の創己祭で並べたりもしました。

私が生まれ育ったのは、地元、富山県南西部、山の麓、南砺市井波です。大きなお寺があって、寺内町ともいわれています。そのお寺の建立時に地元の大工さんたちが、京都から招かれた彫刻士に木彫の技術を学び、多くの木彫刻の職人となりました。

そんな町にあって、お寺の唐様や仏壇の塗り、修繕を行う塗師屋の息子として、ゆくゆくは塗師屋の職人として、祖父の代から父が受け継いだ家業を継ぐのが当然と思い育ちました。職人の家は家族総出で祖母や母も漆を塗る素地のサンドペーパー掛けなどの下仕事を手伝いながら、毎日が過ぎていきます。私も家業を継ぐべく、漆工芸が学べる隣県の美大へ進みました。

そこでは、美術・工芸の教員資格も取って、卒業から4年後に地元の工芸高校で教諭となることができました。その間、地元の漆芸作家さんから、漆仕事の基

礎を習いました。それはちょうど、高岡に高岡短期大学の準備室が立ち上がった頃です。

作品を制作して展覧会に出すことは、大学時代、本格的に漆の専門に入る3年生の時に、赴任してこられた伝統工芸の先生から学びました。当時、本展に大型の漆棚を連続して出品される姿勢は、羨望的でした。塗りの基本から、図案造りまで核心を突いて教えて頂けたことがその後の制作に大きくプラスになりました。

卒業してからは、すぐに、日本現代工芸美術展の公募展に出品しました。地元、井波には彫刻、美術工芸で日展に出品する多くの作家さんたちがおられ、その制作風景に触れる機会が多くありました。自分もそのようになりたいとの憧れがありました。

教職に就くまでの3年半は地元の漆芸作家さんにもっちりとして、下地から研ぎ、塗り、仕上げまで制作を通して修行をさせて頂きました。並行して、展覧会出品の最初は平面パネルの制作から始めました。心象風景を漆で表現して、地元の公募展にも出品することができました。



「美術の楽しみ」の授業で学生が作った、どんぐりの芽の苔玉

1. 工芸美術の制作を通して

初めて、日本現代工芸美術展に入選した作品は、乾漆の立体です。人の形をモチーフにした祈りをテーマにした作品です。小さいころから生まれ育ったお寺のまちの影響でしょうか。

その後も、自然の対象の中から単純な曲面、特に流れるような流線形を意識した造形を制作しました。最初は、井波のまちで手に入れた、木の塊から彫り込んで、組み合わせて素地としました。木彫の盛んな町は、銘木店などで手ごろな木の彫刻材料を入手することが容易です。

それから、より自由な形態を制作するため、粘土で原型を制作して、石膏で外型を取り、麻布や樹脂を張り重ねて形を抜き取る、脱乾漆の技法を利用するようになりました。荒い麻布で形を起こして、布で塊を包むような形で箱を作ったりもしました。

現在の工芸美術の作品制作は、60℃ほどになるまで加熱すると柔らかい粘土状になり、大まかに造形したものを、常温でスクレーパーにより精密に削り出すことのできるインダストリアルクレードで造形して原型とします。その原型を石膏で型取りして、エポキシの粘土状樹脂で型取りする方法で素地を制作する技法に行き着きました。その後は、さらに形を整えてのち、生漆で素地を固め、漆下地、研ぎ、塗りへと工程を重ねていきます。

立体造形としての形を見せるため、紙肌の質感を作ることもあります。塊として造形した形が前面に出て、ストレートにその表現を伝えます。

最近までの作品では、抵抗感の有る風の中を進む形。風が通り抜ける立体。水の流れが砂に軌跡を彫り込むような風貌。自然の中にある普遍的な流れの束を刻み込むことを制作の中に表現したいとも思っています。何気ない一瞬で、最初からそこにあったような自然な在り様が表現できたらと思います。

1980年3月 第19回日本現代工芸美術展 初入選
東京都美術館

1988年11月 第20回日展第4科工芸美術 初入選
東京都美術館

1994年7月 視座—富山の作家展 象 富山県民会館美術館

2001年3月 第40回記念日本現代工芸美術展 現代工芸本会員賞 東京都美術館

2010年3月 第49回日本現代工芸美術展 蓮田修吾郎賞 東京都美術館

2010年11月 第42回日展第4科工芸美術 特選
東京都美術館



漆立体「軌跡A」 1996年10月
国際漆デザイン展96・石川
石川県地場産業振興センター・大ホール



漆立体「空からの理音・RION」 1997年6月
第52回富山県美術展 工芸部門 県展大賞
富山県民会館美術館



遙か想い 2010年11月
第42回日展第4科美術工芸 特選
東京都美術館



沈黙の空 2016年4月 第55回日本現代工芸美術展
東京都美術館

2. 屋外展示への展開

1993年2月に第1回の富山国際美術交流展が地元富山の作家有志で立ち上がった。県内外の日本人作家34名と台湾、フランス、アメリカ合衆国、韓国の4名の海外作家とフランスのデザインと美術学校2校が参加し、現代美術の平面立体作品を出品展示した。そして、翌1994年1月と1997年1月の第3回展までは富山県民会館美術館での開催となる。間に、4年間を空けて2002年5月からは新川文化ホール（魚津市）で開催された。その時から、平面作品は屋内会場で展示されたが、立体作品の何点かが文化ホール横に広がる芝生広場の屋外で展示を試みることとなり、その中に加わった。その後、4年ごとの2006年、2010年、2014年、2018年の第8回展まで屋外の展示を行う。2022年5月には第9回展の開催を予定している。

併せて、2010年8月から本学の渡邊先生が中心となって企画が始まった、富岩運河環水公園で開催のGEIBUN オープンエアミュージアム in 環水公園にも12回目となる本年まで、欠かさず、屋外展示で作品を出品している。屋内外を含めて展示された本学部学生、卒業生の作品と共に、本年も噴水広場横の芝生の上で、柱材と板材を組み合わせて、漆と樹脂を塗り込んだ組作品を展示した。

これらは、今年で第22回を迎える高岡市吉久地区の秋祭りと共に開催されてきた、「さまのこアート in よっさ」でも2001年の初期のころから10数回に渡り、まちなみの屋外展示で参加している蓄積から、古い町並みの雰囲気 작품을融合させ、風景を意識した空間構成のスタンスを今も継続している。高岡短期大学の時代には、古い町屋の居住スペースで漆や金属、木材工芸学生有志が作品を展示して、長く会場として使わせて頂いた。その瀬川家のおばあちゃんに学生たちが年中行事を通して、新年の餅つきをしたり、おいしい手料理を頂いたりして、親しく交流していた情景が思い出される。

2009年には、黒部市国際文化センターコラーレの企画展として「Art Grove in COLARE 齊藤晴之×藤井武」において洋画の藤井武さんとセンター屋内と屋外でコラボして自由な展示空間を展開した。ここでは、立体作品をセンター屋外の池の中や歩道通路の周辺に、風景に合わせて、7点の大型組作品を展示した。風景の中に溶け込むような自然な在り様で、空間の大きな広がりを目指した。

1993年2月 '93ART/XE/TOYAMA 第1回富山国際美術交流展 富山県民会館美術館

1994年1月：第2回展、1997年1月：第3回展 富山県民会館美術館

2002年5月 第4回富山国際現代美術展 2002ART/X/TOYAMA 新川文化ホール屋外展示 以降2006年：第5回展、2010年：第6回展、2014年：第7回展、2018年：第8回展、2022年：第9回展〔開催予定〕 新川文化ホール

2001年10月～2010年10月 さまのこアート in よっさ 参加 高岡市吉久町

2009年7月「Art Grove in COLARE 齊藤晴之×藤井武」黒部市国際文化センターコラーレ



さまのこアート in よっさ 高岡市吉久



「Art Grove in COLARE 齊藤晴之×藤井武」黒部市国際文化センターカラーレ 2009年



GEIBUN オープンエアミュージアム in 環水公園 2021 富山市富岩運河環水公園 2021年

3. 海外での交流活動

もう一つの大切な出会いが、海外での交流の機会でした。それほど数は多くありませんが、一つ一つが、制作への節目として強く印象に残っています。2003年の2月の一番寒い時期に、海外の動向調査としてニューヨークに1か月ほど、滞在して、アートスチューデントリーグオブニューヨークで石彫のレクチャーを受けながら、現代美術の動向を調査しました。

1875年に設立されたニューヨーク市マンハッタン区の西57丁目にある美術学校で、石彫の斎藤誠治先生に手ほどきを受けました。富山出身でニューヨークにおいて活動している彫刻家の吉野美奈子さんに紹介して頂きました。その時は、同じ石彫クラスの先輩受講生からイタリアの大理石を分けてもらって、2月後半に始まるスクラップチャー クラス エキシビションに出品する石彫作品を制作しました。ニューヨークの一番寒い季節を体験しました。朝起きると、車が埋まるほどの積雪で、電車のドアが凍り付いて、市内の美術館が閉鎖されたこともあったが、街なかにスキーを履いて移動する人やセントラルパークに大勢の市民がそりをもって集まり、小高い斜面でそり滑りを楽しんでいる光景がそこにありました。そして、ブロンクスにある誠二先生のアトリエを訪問し、等身大の本格的な石彫制作の設備や工程、制作に向けての何枚ものデザインを見せてもらいました。

2005年には、ほんの2週間ほどだが、2002年9月から、大学間友好交流協定を締結したフィンランド共和国ラハティ・ポリテクニク（現ラハティ応用科学大学）へ、周辺美術大学の調査と現地で開催された高岡短期大学学生作品展の作品搬出を担当して訪問しました。

また、2006年6月29日から7月15日の期間には、オーストリアの田舎町、グローショナウで国際木彫刻キャンプに参加、現地で調達した直径が80センチほど、長さが2mを超える丸太2本を使って、屋外彫刻を制作し、約2週間で完成させました。制作の途中には、何度も周辺の村々の消防署集会室や広場で交流会に招かれました。その地方では消防署が周辺住民の集う交流拠点となっていた。井波木彫刻協同組合から同じく派遣された、横山丈樹さんには、いろいろな場面で助けてもらい、ヨーロッパの東欧周辺国から国々の彫刻キャンプを渡り歩くベテランの木彫刻家たちから多く助けを頂き、共に協力しながら、制作交流を深めた。完成した彫刻は、町周辺の通りに、それぞれ場所を決めて設置された。

2010年8月にはタイ王国のパタナシン芸術大学の招きでパタナシン芸術大学チャンシン校の教員を対象とした漆蒔絵の短期講座、ワークショップを行いました。

た。3泊4日の期間、正味3日間で漆の手板に漆で絵を描き、銀蒔絵丸粉を蒔きつけて、塗り込み、研ぎ出し、艶上げまで行いました。強行スケジュールではあったが、タイの教員の皆さんに日本の蒔絵の醍醐味を体験してもらいました。日本から持参した黒蠟色漆や、日本産の生正味漆がタイの気候の中でも、遺憾なく、その性能を発揮しました。

タイの漆は日本産や中国産の漆とは主成分が異なり、全く様相が違っています。現地では、その特徴を生かして、伝統の箔絵が緻密な文様で施される表現が多くみられました。

2003年3月3日 The Art Students league of New York sculpture class exhibition

2005年9月9日～22日 高岡短期大学学生作品相互交流展（ラハティ・ポリテクニク）

2006年6月29日～7月15日 国際木彫刻キャンプ in オーストリア グローショナウ

2010年8月 パタナシン芸術大学チャンシン校 大学教員対象蒔絵講座集中講義



アートスチューデントリーグ オブ ニューヨーク
アメリカ合衆国 2003年 制作工房



タイ パタナシン芸術大学チャンシン校での漆ワークショップ タイ王国 2010年

4. 新しい造形への挑戦

新しい造形への展開としては、1989年から石川で開かれた漆のデザインコンペに挑戦しました。漆と木を組み合わせて純粋に造形としての新しい表現を試みました。次世代の生活環境の中で独創的な発想と手法で漆や塗料の持つ特性を問い直すコンペティションとして、デザインや工芸とアートのジャンルを超えた作品が全国から出品されました。その中でアートを意識した造形作品として出品しました。

同じころ、地元新聞社主催の絵画、彫刻、工芸、書、写真の異分野の作家が現代美術の表現を競う20人展にも招待されました。ここでも、漆と木の素材を組み合わせた自由な造形で新しい創作の方向を提示しました。これらの方向性は、年代や表現を超えて一堂に会する企画展として、その後の美術大賞展への招待出品に繋がりました。

さらに、明確に個性を打ち出す作家が招待された企画として、美術館会場でその表現を競い合う、富山近代美術館で開催の「可視化の構造—11の空間」展や富山県民会館美術館での「富山の美7人のいま・未来」展に招待されて出品展示しました。それらは、はっきりと会場を11の空間や7つのブースに区切って、日本画、洋画、彫刻、ガラス、金属、漆造形、生け花造形などの作家が個性的な自己の表現を追求した空間を創り上げた。

そのころ、富山のギャラリーでの個展にも誘ってもらい、日本人とカナダ人のキュレーターが企画して、倉庫を改造したギャラリー空間で継続的に作品を発表した。自身の新しい試みに挑戦する機会を得ました。小さなキャンバスにアクリルで平面表現をすることも試して、個展会場で展示しました。元来、漆素材の表現は平面にも立体にも自由に展開できる可能性を最初から持っていることを再確認することになりました。

コンペティション

- 1989年 ‘89 ジャパンデザインコンペティション石川 奨励賞 石川県地場産業振興センター・大ホール
 - 1991年 ‘91 ジャパンデザインコンペティション石川 奨励賞 石川県地場産業振興センター・大ホール
 - 1993年 ‘93 国際デザインコンペティション石川 入選 石川県地場産業振興センター・大ホール
 - 1996年 10月 国際漆デザイン展96・石川 入選 石川県地場産業振興センター・大ホール
 - 2001年 9月 2001 世界工芸コンペティション・金沢 入選 金沢大和デパート
- 新聞社企画展
- 1989年 新鋭選抜 ‘89 とやま 20 人展 招待出品 高岡市美術館

- 1990年 新鋭選抜 ‘90 とやま 20 人展 招待出品 高岡市美術館
- 1991年 新鋭選抜とやま 20 人展総集編 招待出品「北日本新聞社賞」 高岡市美術館
- 2004年 第5回北日本美術大賞展 招待出品 「特別賞」 富山県民会館美術館
美術館企画展
- 1997年 とやま現代作家シリーズ 可視化の構造-11の空間 富山県近代美術館
- 2005年 富山の美7人のいま・未来展 富山県民会館美術館
- 2000年 2000 となみの美術展 工芸部門賞 北日本新聞社賞 砺波市美術館
- 2007年 2007 となみ野美術展 となみ野美術大賞 砺波市美術館
個展
- 1997年 木と漆の立体「40番目のかけら」 MAU FINE ART
- 2000年 斉藤晴之漆芸展 MAU FINE ART
- 2001年 斉藤晴之展 MAU FAINE ART
- 2006年 斉藤晴之「漆芸」工芸の秀作 砺波市美術館
- 2007年 となみ野アート 斉藤晴之展 北日本新聞社砺波支社ギャラリー



「富山の美 7人の今・未来」展 富山県民会館美術館 2005年



齊藤晴之漆芸展 MAU FAINE ART 富山市内 ギャラリー 2000年

5. 教育において

教育においては、漆塗装の基礎から、それらに使う道具作り、乾漆技法による造形的表現などを担当させて頂きました。いろいろな面で、自分自身が基礎から学び直しながら、新しい発見もありました。基本に忠実に、体を動かしながら体得していくことの大切さを学生と共にやることによって再認識したことも多くありました。所属の教育担当は高岡短期大学の漆工芸専攻から産業造形学科に、専攻科の2年間が加わり、富山大学に統合してからは、造形芸術コースから現在の美術・工芸コースへと移行しながら教育分野を広く垣根無く担当することができました。

高岡短期大学時代には、漆工芸専攻として、工芸美術の故横山幸文先生や化学工学の蜷川先生に、生活用品の何でも伝統工芸や漆造形表現に応用する柔軟な発想の根本廣子先生が加わって、教員が総勢7名の時代もありました。漆祭りを始め、年中行事でも学生と教員が深く繋がる家庭的な雰囲気が作品制作でも成果に繋がっていました。

専門以外の基礎科目では、大学統合して直後の新設科目、立山マルチバース「感性をはぐくむ」においては立ち上げの前任者から受け継いで、4年間ほど各学部から選出された教員のまとめ役を担当させて頂きました。芸術文化学部の工芸、デザイン分野から医学部、人文学部の専門分野まで脳科学、文学、哲学を通してひとの感性を解き明かすオムニバスの授業です。連絡調整を繰り返しながら、他学部の先生方の人となりに触れ、改めて自分の専門を見直す機会となりました。

また、教員養成教職専門分野では、永く、教員免許更新講習の学部内調整を担当し、多くの先生方に講座開設の協力を頂きました。私自身も講座を担当し、県内の石彫刻の造形作家やインスタレーションに係る作家、高岡の原型師作家の方々にも協力をお願いして、中学高校の美術教育や小学校の図工科目にも展開できる専門の事例を計画して課題制作を行うことにより美術授業への応用の仕方を共有することができました。芸術文化学部は絵画、彫刻、工芸、デザイン、建築、美術史の各専門分野が垣根無く学べる環境で、美術教員を育てるには最高の環境であると思います。そして、教職専門担当の教員が手厚く指導する姿勢により、ここ数年、特に、確実に教職採用試験を受験すれば採用に結び付くだけの実力を学生たちが身に付けていると確信します。

そしてまた、芸術文化学部が担当する一般教養「美術」授業の調整役をキュレーションの先生方から引き継いで担当させて頂きました。他学部の学生にも芸術文化学部の幅広い専門性を発信し、多くの学生が履修しています。2021年には、三井アウトレットとの連

携協力として、担当の内田先生、渡邊先生に声を掛けてもらい、美術・工芸専門分野の教員が学生と協力して日頃の成果を展示、発信できたことが貴重な経験になりました。これらは、学部教員がいろいろな場面で、力を合わせるにより芸術文化の多様性や心に響く表現の輝きを多くのひとや地域に発信できる機会になることを確信しました。このような、美術や造形、工芸のもののつくりが教育においても力を発揮して、地域を元気にする原動力になります。これからも、その蓄積を生かして、制作の楽しさを共有していきたいと思えます。

6. 地元とのつながり

1999年にいなみ国際木彫刻キャンプ'99で、地元の美術協会のメンバーとして、グループ制作の屋外彫刻に取り組みました。今も八乙女山の山麓にある、閑乗寺高原に設置されています。4年に一度開催される国際木彫刻キャンプは世界の5大陸から木彫作家が招待され、国内、県内、そして地元の木彫刻協同組合と井波美術協会の代表、グループメンバーが約2週間の制作期間で樟の原木から木彫刻を完成させる。海外の作家たちとの交流やいろいろな企画、コーディネートを通して、制作交流の歴史を作ってきました。その中で参加した交流企画としては、世界一長いベンチの制作でギネスに挑戦や、庄川町の挽き物でつくった直径10cm程の木の玉を木地にして、そこに思い思いの絵を描き、何百個も繋いで数珠を作る企画では、芸術文化学部の学生たちも企画協力に参加して、地元の小学生や一般の住民も巻き込んで、完成させました。ある年の木彫刻キャンプのポスター制作においては、ポスターに使われる木彫原型のデザイン構想に学生たちの発想力を借りながら、デザイナーと協力してまとめを行ったこともありました。

その他、毎年、秋に開催された、「まちなみアート in いなみ」では、その中で「お寺でアート」の企画名で、コーディネーターとして県内在住の日本画、洋画、版画や創作書道の作家たちに声を掛けて、瑞泉寺周辺五カ寺の本堂空間で、現代アートを展示する企画運営を今も継続して行っています。その中では、毎年、町なかの照円寺本堂で芸術文化学、絵画専門の大学院生を中心に絵画展示企画に参加してもらっています。お寺の古い建築空間の中での展示構成や地元の観覧者との交流は、制作への展開で新たなインスピレーションを得る、ひとつの貴重な要素となっていると思います。参加した作家の方々も、美術館やギャラリーでの展示とは違った、文化の歴史や、より身近な心の交流を経験してもらっています。

つい最近では、2021年の井波本町通り振興会の町

並み賑わい事業のひとつとして、瑞泉寺から1キロメートルほどの範囲で続く、本町通りの街燈に吊るす樹脂製メッシュのタペストリーを本学部でデザインを学ぶ学生たちに原画デザインを作成してもらいました。3つの図柄のパターンで2021年9月から設置され、町の通りに彩りをプラスしています。

このように、多くの機会でも美術、工芸、デザインを学ぶ学生たちと地元の文化やものづくり産業分野で交流できることが貴重な財産となっています。

また、漆専門分野で長く指導を頂いた、故横山幸文先生の繋がりから、安曇野高橋節郎記念美術館と豊田市美術館高橋節郎館の収蔵品、故高橋節郎先生の槍金漆屏風等の修復に携わる貴重な機会を得ることができたことが感謝であります。

7. 素材について

工芸、造形素材として漆に出会い、いろいろな可能性に日々、発見があります。その漆は天然の樹脂で、木材の素地を生漆で固めて、糊漆で麻布を貼り、下地を施して、研ぎ、塗りを重ね、艶を上げる蠟色仕上げまで、砥の粉や地の粉、米のりなど、いろいろな天然素材を混ぜ込みながら、一つの作品として完成していきます。金属や焼しめの陶には焼き付けで塗装することもできます。金粉、銀粉による蒔絵や貝を使った螺鈿、卵殻や植物の繊維など自然の中のいろいろな素材を取り込んで加飾に利用することが先人の知恵で、長い歴史の中で作り上げられてきました。その、様々な知恵や技術を修得しながら作品を制作することはいろいろな可能性に向けて創造力を発揮する魅力的な作業です。

また、造形芸術の分野では、立体造形の基礎から、クレー原型の樹脂取りや柔らかい石灰質の石材や印材にも使われる滑石の彫刻など、いろいろな素材に触れながら造形の可能性を模索してきました。授業の中でもインスタレーションの表現としてキャンパスのいろいろな空間で思い思いの素材を使って、独自の感覚で作上げた作品は学生たちの新鮮な発見となりました。そして、日頃から整備された機械作業室があることで、木材の加工や金属材料の加工が容易にできたこと、制作加工環境が揃っていることも大変ありがたいことでした。このような環境で制作研究を行い、27年間を通して、多くのひととかかわりながら、学生たちと共に、研鑽できたことが感謝であります。

地元高岡の職人さんにも、指物木地や曲げ物の木地制作をお願いしたり、原型師さんに樹脂取りの仕方を伝授してもらったりと、工芸都市高岡の恩恵も多く頂きました。

その中でも、漆工芸の貴重な材料としては、地元、

高岡漆器、中厚貝の職人さんで故竹林武二郎さんのご家族から中厚貝の貴重な工芸材料と工具一式をご寄付頂いたことが、記憶に残る特筆すべき出来事でした。それらの材料で螺鈿の表現を学び、今ではあまり行われなくなった中厚貝の技法を竹林さんに習った職人さんや家族の方から学生たちが講習を受けたこともありました。高岡の地であって、大切にしなければいけない繋がりがこれからもたくさんあるように思います。地域の中で育まれた多くの文化をこれからも大事にして、ものづくりを続けていきたいと思っています。自然から頂いた、多くの素材を使いながら、ものづくりに携われたことが感謝です。高岡キャンパスで出会った、先生方、職員の皆様、学生たちから頂いた大切な時間を、これからも何かを作りだしていく原動力にしていきたいと思っています。有難うございました。